広島大学附属三原学校園研究紀要　第１集　2011　pp. 79-84

音　楽　科

〔共通事項〕を柱に据えた音楽づくりの授業

—第１学年「がくえんのうたをつくろう」の実践を通して—

向　井　さ　ゆ　り

１，はじめに

小学校に入学したばかりの１年生に音楽科の授業でつけたい力を，どのような方法で習得させることができるであろうか。歌唱の活動は楽しく行えているが，器楽や音楽づくりにおいては，表現の技能の習得ができておらず，なかなか活動がしにくい。しかし，今回の学習指導要領の改訂でも，１年生が十分にできていない「音楽づくり」そして「鑑賞」の領域が課題としてあげられている。

では，１年生の段階でどのような活動ができるであろうか。そこで，今回の学習指導要領で新設された〔共通事項〕を柱に据えた低学年での「音楽づくり」の授業を考えていくこととした。

２，研究の構想

(1) 共通事項を柱に据えた音楽づくりとは

今回の学習指導要領で新設された〔共通事項〕は表現及び鑑賞の全ての音楽活動において，共通に指導する内容であり，〔共通事項〕のみを単独で扱うものではない。

表１　小学校学習指導要領〔共通事項〕[1)]

(低学年)
【音楽を特徴付けている要素】
音色，リズム，速度，旋律，強弱，拍の流れやフレーズなど
【音楽の仕組み】
反復，問いと答え

だから，表現及び鑑賞の各音楽活動を指導する中で〔共通事項〕を指導し，音楽活動に生かしていくことが求められている。また，音楽の基礎基本の定着を図り，音楽に対する思考力・判断力を育成するためにも，〔共通事項〕は不可欠である。

「音楽づくり」は，一人ひとりが今まで培ってきた感性や創造性を発揮しながら音楽的な表現を追究し，自分にとって価値のある新しいものをつくり出す活動である。よって，表現や鑑賞の学習で習得した技能や音楽を感受する力を活用しながら，新しい音楽を自分でつくりあげていく学習である。

低学年の「音楽づくり」では，声や身の回りの音のおもしろさに気付いて音遊びをしたり，音楽の仕組みを生かして，自分なりの思いをもって簡単な音楽をつくったりする活動を進めていくことが大切である。また，「音楽づくり」をするにあたって，〔共通事項〕を柱に据えて題材計画をたてていくことが重要である。〔共通事項〕は新しい内容ではなく，これまでも「表現」領域「鑑賞」領域において扱われてきた内容ではあるが，題材全体の構成にまで及ぶ扱いはしてきていない。しかし，〔共通事項〕を柱に据えて題材全体の構成を考えることで，より指導内容が明確となり，音楽科の基礎基本の定着がより効果的になると考える。

(2) 低学年での音楽づくりの学習

①表現技能の習得が「音あそび」を通してできる題材の構成をする

低学年で「音楽づくり」をするにあたって，「どんな音楽をつくりたいですか」「思ったことを音楽にしましょう」という学習は成立しない。まず，

音楽を感じる力，感じたことや思ったことを表現しようとする力，そして表現する力（以下表現技能）が必要なのではないだろうか。

ここでは，表現技能を習得し，習得したことが「音楽づくり」に生かすことのできる題材構成を行う。

そこで，〔共通事項〕の「拍の流れやフレーズ」を基盤にして「リズム」の習得をねらいとした音楽づくりの授業を考えた。

まず，４拍子の流れを感じ取りながら４拍子の拍の流れのなかに簡単な言葉を調子よくあてはめる「音あそび」をする。これは，子どもたちが拍の流れを感じながら拍子感覚を習得し，そこに自分の感じた「リズム」を合わせていく「音楽づくり」へとつなげていくことができる。

②習得した表現技能を「音楽づくり」に生かす

子どもたちも，できるようになったことを次の活動に生かしたい，という気持ちは大いにある。そこで，「音あそび」を通して習得した「拍の流れを感じる」「リズム」を活用した新たな学習課題を設定していく。

「音楽づくり」は，さまざまな活動や方法があるが，まだ低学年であり初歩の段階なので，曲の一部分を作る活動にし，子どもたちが「このくらいならできる」「『音楽づくり』は簡単だな」と感じ取れるようにしていく。そして，身近な内容を歌にし，即興的に考えた言葉をあてはめていけるような学習を設定し，習得した表現技能が生かされるようにする。

３．実践例

(1) 題材

「みんなでつくろう　～がくえんのうた～」

(2) 授業実施学年及び人数

第１学年　40名

(3) 調査実施期間

平成22年11月

(4) 題材について

音楽づくりは，一人ひとりが今まで培ってきた感性や創造性を発揮しながら音楽的な表現を追究し，自分にとって価値のある新しいものをつくり出す活動である。低学年では，音を音楽にしていくことを楽しみながら音楽の仕組みを生かし，自分なりの思いをもって簡単な音楽をつくる活動を大切にしていく。本題材では，学園の歌をつくる活動を通して〔共通事項〕の「拍の流れやフレーズ」と「リズム」を柱に据えて，４拍子の流れを感じ取りながら即興的に音楽を表現できる力と，思いをもって音楽づくりをしていく力の２つの「音楽づくり」の要素を含んだ学習ができると考える。拍の流れを感じながら即興的な表現ができるようにするために「音あそび」を行う。このことで感性や創造性といった無意識の部分を膨らませ，音楽づくりの活動を通してそれらが意識化され，音で表現する楽しさを味わわせることができると考える。

(5) 子どもの実態

本学級は，体を動かしたり歌を歌ったりするのが好きな子どもが多い。しかし，好きだけれども，間違えると恥ずかしい，どうやったらいいかわからないなどの理由で，自分の感じていることを表現できない子どももいる。一部の元気の良い子どもの意見に流されてしまう傾向もある。しかし，遊びの要素を取り入れた活動になると，繰り返しやりたがり，特に，手拍子のリズムを聴いて模奏することはとても好んで行っている。しかし，音楽づくりの学習は初めてである。そこで，「音あそび」の活動を繰り返し行うことで，自分で即興的な表現をすることを躊躇せずにできるようにしていき，活動で積み重ねてきたことを次の学習に生かせるようにしていくことが必要であると感じている。

(6) 指導にあたって

指導にあたっては，まず「音あそび」を通して４拍子の流れを体で感じ取り，リズム打ちができるようにしていく。そして，学園の99周年をお祝いする「がくえんのうた」という曲の２小節分（８拍分）にあう言葉と言葉のリズム打ちを４拍子の流れを感じ取りながら考えさせていく。言葉を考

える際には，小集団で活動させ自分の考えを出しやすくし，活動に自信のない子どもにも，一人ではない安心感をもたせ，音楽づくりの活動に参加しやすくさせる。８つの小集団で考えた歌を全部歌うとなると，８番まで歌うことになる。ここで，「がくえんのうたとしてこれでいいのだろうか。」というところに気づかせていき，一つの歌にするための方法を考えさせていく。各グループで作った音楽を，さらに，一つの曲としてどのようにしていけばよいかなど，思いをもった音楽づくりへと発展させていき，子ども自ら問題を見つけ解決していく学習を仕組んでいく。

(7) 題材の目標

○　声や身の回りの音の面白さを見つけ，音に関心をもつことができるようにする。

○　音を音楽にしていくことを楽しみながら，思いをもって簡単な音楽を作ることができるようにする。

○　拍の流れにのって簡単なリズムを表現することができるようにする。

(8) 学習計画　（全７時間）

第１次　４拍子の流れにのって音あそびをしよう・・・・・・・・・・・・・・・・・・２時間

第２次　「がくえんのうた」をつくろう・・・・・・・・・・・・・・・・・・４時間

第３次　発表会をしよう・・・・・・・・・・１時間

＜第１次　第１時＞

第１次では，言葉をつかった「音あそび」を行った。

（リズム１）タン　タン　タン　ウン

（リズム２）タタ　タタ　タン　ウン

上の２つのリズムに合う３文字と５文字の絵カードを準備した。その中から(リズム１)と(リズム２)のそれぞれにあてはまる絵カードを選び，４拍子の流れにのりながら「音あそび」ができるようにした。この活動をするときに，指導者がウッドブロックで拍を打ち続け，テンポが一定になるようにした。

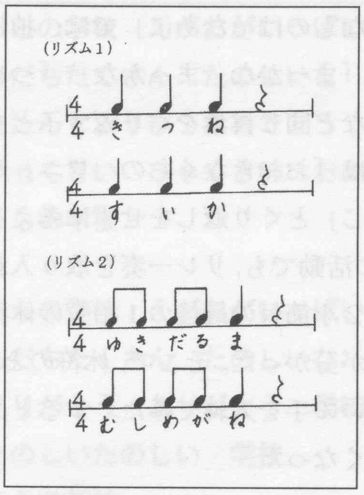

図１　言葉のリズム

この「音あそび」は，４拍子の流れを感じ取り，リズムを言葉やリズム打ちで表現できるようにすることをねらいとして行った。繰り返しの活動が習得につながるので，活動が単調にならないように，「全員で唱える」「グループで唱える」「一人ずつ唱える」など，人数に変化をもたせる工夫をした。また，この活動に，リレー奏を取り入れた。授業の始めのころは，拍の流れにのれず，途中で止まったり拍がずれたりすることもあったが，何度か繰り返していくうちにテンポよくできるようになった。

＜第１次　第２時＞

４拍の流れにのって「音あそび」ができるようになったので，次に４分の４拍子２小節分（８拍分）に言葉をあてはめていく「音あそび」を試みた。「あなたのお名前なあに」と「すきなものはなあに」の２つのあそびである。子どもたちは，２小節の中に自分の名前や考えた言葉がおさまるように，手拍子で拍を打ちながら考えていた。

【活動の具体例】

T「すきなものは　なあに」

C１「まっかな　まっかな　りんご」

T「好きなものは　なあに」

C２「むらさきいろの　ぶどう」

「すきなものは　なあに」では，拍に入りやすいように「まっかな　まっかな」「つめたい　つめたい」など同じ言葉をくり返す子どもが多かった。中には「おおきなくちの　ワニ」や「きれいな　もみじ」とくり返しをせずに考える子どももいた。この活動でも，リレー奏を取り入れてみた。すると，２小節目の最後の１拍分の休符がとりにくいことが分かった。そこで，休符のところで「はい」と合いの手を入れてみた。すると，１拍目が入りやすくなった。

＜第２次　第１時＞

「がくえんのうたをつくろう」ということで，次の歌の手拍子部分（４分の４拍子　２小節分）の言葉を考える活動を設定した。考える言葉は，附属学園の99歳をお祝いする言葉である。

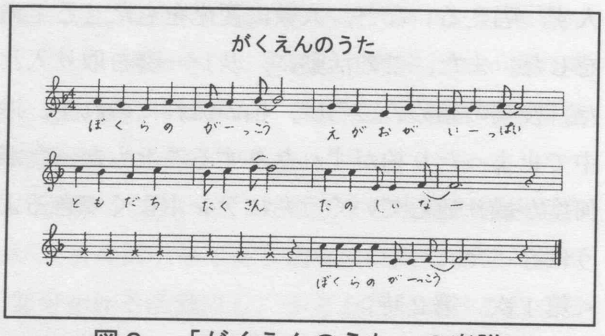

図２　「がくえんのうた」の楽譜

５人ずつのグループで言葉を考えていった。

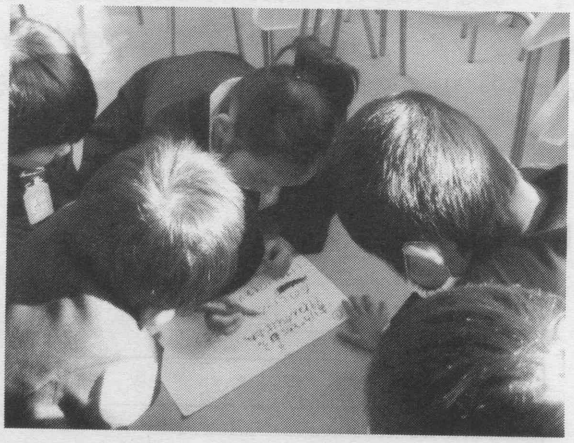

図３　どんなことばがいいかな？

各グループとも，たくさんの言葉を考えていた。そして，出し合った言葉が調子よく２小節におさまるかどうか，手拍子をしながら確かめていた。

図４　手拍子をしてたしかめてみよう

＜第２次　第２時＞

まず，各グループで考えた言葉を交流し，次に自分たちで考えた言葉を歌に入れて「がくえんのうた」を発表していった。その際に，言葉を唱えた後に言葉のリズムを手拍子で入れる，ということをしていった。

発表では，各グループとも，言葉の部分は５人の声が揃っていて拍を感じながら唱えられていた。しかし，言葉のリズムを手拍子にする，という部分でばらつきが見られた。

【各グループが考えた言葉】

- おたんじょうび　おめでとう
- みんなたのしい　学校
- かわいいえがお
- ９９さい　すごいね
- ありがとう　ありがとう　学校
- ９９さい　おめでとう
- たのしい　たのしい　学校
- ひゃくさい　ひゃくさい　おめでとう

発表が終わり，全員で各グループが考えた言葉を入れながら，８班までの歌をつなげてうたってみた。そこで，「『がくえんのうた』にするためにこのままでいいかな。」という問いかけに続い

て，次のような意見が出た。

Ｐ：もっとうたをもりあげたいです。
Ｐ：もっと（言葉を）つけ足したいです。
Ｐ：ことばのあいだに，もっといっぱい（言葉を）いれるといいと思います。
Ｐ：おどりをつけたら，たのしくなっていいと思います。

そこで，次の時間に，みんなの意見をまとめて，歌を仕上げていこうということになった。

＜第２次　第３・４時＞

前時の意見を受けて，「がくえんのうた」をよりよくしていくには，どうするか，ということを考えていった。

前時に出ていた意見も出し合ながら，新しい意見も加わり意見が分かれた。すると，「考えた言葉の前後の歌詞は変わらないのだから，グループが考えた歌をつなげるだけでは，長いだけでよくない。」という意見が多くなった。そこで，次なる方法として，次のような意見が出た。

・８番まであると長すぎる。
・８つをまとめて一つの言葉にする。
・２つずつを組み合わせて，４番までのうたにする。

そして，①どのグループの言葉も歌える②歌いやすくなる③ちょうどいい長さになる，という理由で，４番までの歌にしていくことになった。その後，どの言葉とどの言葉をつなげるとよいかを考え，「がくえんのうた」を完成させていった。

「がくえんのうた」

１　ぼくらの学校　えがおがいっぱい
ともだちたくさん　たのしいな
９９さい　すごいね
９９さい　おめでとう
ぼくらの学校

２　ぼくらの学校　えがおがいっぱい
ともだちたくさん　たのしいな
おたんじょうび　おめでとう
ひゃくさい　ひゃくさい　おめでとう
ぼくらの学校

３　ぼくらの学校　えがおがいっぱい
ともだちたくさん　たのしいな
ありがとう　ありがとう　学校
たのしいたのしい　学校
ぼくらの学校

４　ぼくらの学校　えがおがいっぱい
ともだちたくさん　たのしいな
みんな　たのしい　学校
かわいいえがお
ぼくらの学校

＜第３次＞

「できあがった歌を，５年生に向けて発表しよう」という目的をもち，学級を２つに分けて練習し，聴き合った。

４，考察

「共通事項を柱に据えた音楽づくりの学習」について，子どもたちの学習の様子，アンケートをもとに考察する。

(1) 表現技能の習得が「音あそび」を通してできる題材構成について

本題材では，「音あそび」を通して習得した言葉のリズムを「がくえんのうたをつくろう」という活動につなげ，自分たちで考えた言葉を歌の２小節分に調子よく入れ，オリジナルの歌をつくる題材の構成にした。

「音あそび」では，拍の流れを感じながら４拍子の拍子感覚が習得できるように，拍を感じながら言葉のリズムを唱える活動を毎時間取り入れた。最初は言葉が拍にあわなかった子どももいたが，毎時間繰り返しやることで，ひざを曲げたり頭を

前後に動かしたりして拍を体で感じながら言葉のリズムが唱えられるなど，拍の流れを感じられるようになった。

授業後に，一人ずつ言葉のリズムとそのリズム打ちが，拍の流れにのってできるかどうかの調査を行った。調査内容は，４分の４拍子２小節分に合う言葉を考え，その言葉が拍の流れにのって唱えられているか，また，その言葉をリズム打ちできるか，というものである。その結果，「４分の４拍子の拍の流れを感じながら言葉を唱えることのできる」は40名全員であった。「言葉のリズムを手拍子でうつことができる」は38名であった。

このことから，「音あそび」の活動を通して，リズム表現の基礎となる拍子感覚を習得し，調子よく言葉をおさめられるようになり，言葉を使ったリズム表現ができるようになったと考える。

(2) 習得した表現技能を「音楽づくり」に生かしていったことについて

４拍子に調子よく言葉をおさめられるようになったことを生かし，「がくえんのうたをつくろう」という「音楽づくり」へと発展させていった。子どもたちは自然に拍を打ちながら，自分たちで考えた言葉がうまく４分の４拍子２小節分におさまるかどうかを考えていた。このような姿から，習得したことを生かした学習展開ができたと考える。

子どもたちのアンケートでは，「学園の歌を作る活動はたのしかった」38名，「楽しくなかった」２名であった。具体的には，「２小節（８拍分）の言葉を考える活動が楽しかった」23名，「言葉や言葉のリズムを手拍子して歌えたことが楽しかった」20名と，言葉を考える活動が楽しくできたようである。

以上のことから，「音あそび」から「音楽づくり」へ発展させる活動を通して，〔共通事項〕を柱に据えた「リズム」の習得にも有効であったと考える。

５，おわりに

「『音楽づくり』は難しい」ととらえていたが，〔共通事項〕を柱に据え，どの要素や仕組みを授業で扱っていくかを考えて題材構成をしていけば，筋の通った学習になることが分かった。言い換えれば，つけたい力をより明確にすることができるのである。また，〔共通事項〕を柱に据えて題材構成をすることで，音楽科の学習を連続的・系統的に行うことができることも分かってきた。このことは，音楽科でつけたい思考力・判断力・表現力をはぐくむためには重要なことである。

このたびの実践では「拍の流れやフレーズ」を基盤にし「リズム」の習得に着目したが，まだまだ示されている〔共通事項〕はある。それらを，今後の「音楽づくり」に取り入れることは，子どもたちの音楽活動の引き出しがどんどん増えていくことになるであろう。

今後，習得した言葉のリズムを使った「音楽づくり」をどう生かしていくかが課題である。記譜法や器楽などに発展させることも可能であるし，リズムだけの音楽に発展させることも可能である。

今回の学習指導要領で新たに示された〔共通事項〕を取り扱うことは，音楽の基礎学力の習得へとつながるものであり，今後も，題材ごとに〔共通事項〕から柱をたて，それと絡みあう題材構成を考えていきたい。

＜引用文献＞

1) 文部科学省：「小学校学習指導要領解説　音楽編」，p. 111，2008，教育芸術社.